

編 集 後 記

<春日井 達 造>

ファーター乳頭は十二指腸における悪性腫瘍の好発部位であり、膵、胆管の十二指腸開口部として古くから注目され、膵・胆道疾患との関連において種々検討されてきたことはよく知られている。しかし、その臨床診断となると上部消化管X線検査や Liotta により初めて開発された低緊張性十二指腸造影法が唯一の形態学的検査法であった。しかし、この数年来ファイバー十二指腸鏡の開発進歩により直視下にこれを観察し、生検や細胞診が行なわれるようになり診断成績も更に向上した。

本号においては十二指腸乳頭部病変の臨床診断における最近の進歩を主題とし、X線と内視鏡診断をとりあげた。わが国におけるこの方面の最新の診断法と研究成果が集録されたわけだが、要するに、十二指腸も胃や食道と同様、診療の第一線の医師にとって自由に料理し得る臓器となったことは特筆すべきであり、肝、胆、膵への従来とは異ったデイメーションからのアプローチも試みられつつあり、今後の進展が楽しみである。

全国からよせられた十二指腸乳頭部病変に関する症例報告は、これらの方法によって得られた興味深い成果であり、この方面の研究者の層の厚さがうかがわれる。

一方、食道の早期癌、重複微小早期胃癌、残胃断端早期胃癌、胃サルコイドーシスなど胃、食道に関する症例もレベルが高く一読に値する。

熱海氏らの胃内視鏡検診車の開発は、集検のみならず辺地、過疎地医療の解決策の一つとして注目される。

なお、本誌7巻4号の「早期胃癌肉眼分類起草10年」の特集に関して、Dr. Gutmann より再度の御寄稿を頂いた。読者諸賢の討議を期待したい。

<編集> 早 期 胃 癌 研 究 会